

中国を敵にして良いのか 反日デモに思う

河野 信

バンドン会議と日中首脳会談

2005年4月23日、インドネシアのジャカルタで小泉純一郎首相と胡錦濤中国国家主席との日中首脳会談が催され、激しい反日デモ行為に対する事態打開の討論が為されました。この会談は「バンドン会議50周年記念会議」の場を借りて行われたのです。

そしてその結果は

「とりあえず傷口に絆創膏（バンソウコウ）をはって出血を止めたということか。傷そのものには何の治療も施されていない。いつかまた、さらに悪化して傷口が開く恐れが強い」（4/24 毎日新聞社説）と評されています。

バンドン会議はアジアの歴史に大きな足跡を残した会議でした。第二次大戦終了10年後の1955年、インドネシアのバンドンにアジア・アフリカ29ヶ国の首脳が集まって有名な「バンドン宣言」を發表しました。長い間の植民地支配を脱したアジア・アフリカの諸国が「民族自決」と「平和共存」を謳いあげたのです。この「宣言」は後に「バンドン精神」と讃えられ、爾後50年、アジア・アフリカ人の心の支えになったのです。

なおこの会議には、インドのネルール首相、中国の周恩来首相、インドネシアのスカルノ大統領、エジプトのナセル大統領など一流の指導者が顔を合わせました。

バンドン会議と比較すると、今回の日中首脳会談は義理にもアジアの歴史に輝かしい一頁を加えたと言えるものではありません。むしろ歴史の皮肉を感じさせるものとなってしまいました。

日中に共通の基盤はないのか

日本の一部民族主義者は、

「中国の愛国主義教育は怪しからん」「日本は何時まで土下座外交をやるんだ」「中国はODAをただ貰いしている」「中国はどれだけ謝れば気が済むのか」「毛沢東は三千万人も自国民を殺した」「日本は何も悪いことはしていない」「中国・韓国は歴史的痴呆症だ」と口を極めて中国を罵倒しています。

これに対して中国のデモ隊は

「愛国無罪」「釣魚島（尖閣諸島）を返せ」「日本の常任理事国入り反対」「小泉の靖国参

拝反対」「改ざんされた歴史教科書反対」「日本商品を買うな」「小日本（シャオイーベン）」と叫び、投石を繰り返し、日本国旗を焼き、小泉首相の写真を踏みにじりました。恐ろしい程の中国青年のエネルギーを感じさせられました。

一部とは言え、この両民族の対立をこのままにしておいて良い筈はありません。両民族に共通の基盤はないのでしょうか。

思いやりが《反日》弱める

4/18の朝日新聞の「時流・自論」欄に「思いやりが《反日》弱める」という投稿がありました。筆者は王敏（ワンミン）さん。54年中国河北省生まれ。現在法政大学教授。彼女の主張を要約すると

- ・ 日本へのあこがれと日本嫌いを併せ持つのが、中国の若い世代である。
- ・ こうした（青年の）行動の根底には儒教思想が流れている。
- ・ 今の中国は体制的には社会主義を建前にしているが、儒教の教えは生活の隅々まで支配している。
- ・ 儒教の「修身齐家治国平天下」の理想は今も生き、中国文明の破壊行為に対しては必死に戦う。

ということになり、結論として

「日本人は人を思いやり、人に気遣う。この日本の美德を隣国の文化との間に広げていただきたい。侵略にさらされたアジアの民衆の視点で配慮してあげれば、中国人の日本観は必ずや変わるはずである。（中略）民族の憎しみ合いは絶対避けねばならない。「和して同ぜず」共生の道を模索しよう」

ということになります。誠に公平な考え方であると思います。

王敏さんは宮沢賢治の研究者として有名で、国柱会の機関誌『真世界』に平成12年1月から1年間に亘り「宮沢賢治の西遊記」を連載しました。国柱会は明治の初め日蓮主義を標榜した田中智学が創立した宗教団体です。宮沢賢治はその会員でした。

石原莞爾も賢治と同じ頃、田中智学の弟子になったのです。

石原莞爾の中国観 儒教と王道

石原莞爾は青年時代から中国に対して強い共感を覚えていました。1911年、中国の孫文の辛亥革命成功の報を聞いて部下の兵士とともに「中華民国万歳」を叫んだ話は石原 に関する語りぐさの一つになっています。

その石原は1940年(昭和15年)「東亜の二大民族」という示唆に富む講演をしました。

「(前略) 日本民族は進歩的で、喜んで他民族の文明を吸収しました。西洋文明を巧みに受け入れて速やかに近代国家を完成し、東亜の危機を救いました。これは漢民族の諸君もお認め下さることと信じます。しかし反面、西洋模倣の結果、覇道的となり、自然に王道に対する熱情を冷却し、東亜諸民族に憎悪せらるるに至ったことは、私共も率直に認めるのであります。

漢民族は保守的で他を蔑視し、西洋文明の摂取に遅れて、東亜の危機を招来した責任は免れ難いのでありますが、同時によく王道に対する信念を堅持し来たことに 対し、私共は心から敬意を払うのであります (後略)」

(『石原莞爾選集』6 「東亜連盟」たまいらぼ刊 1985)

王敏さんは「中国人の行動の根底には儒教精神が流れている」と書いていますが、石原莞爾は「漢民族は王道に対する信念を堅持している」と言っています。儒教と王道はほぼ同義語です。中国人と日本人の間には通底する思想・理想が根強く存在していることは間違いないありません。従って日中両民族が仇敵のようにいがみ合うのは、本質的に間違っています。この際日本民族は王道に対する熱情を再びもえあがらせル満州国の建国精神は「王道楽土・民族協和」でした。

庶民の交流 日中理解に自ら発信しよう

石原莞爾は 1939 年(昭和 14 年)アジアの大同を目的として「東亜連盟協会」を設立しました。当時は日中戦争の最中だったのですが、東亜連盟運動はたちまち多くの国民の共感を得て、全国各地に支部が設立されました。

また東亜連盟運動を推進するためのテキストとして『東亜連盟建設要綱』が発行されました。その中で「民族協和の心構え」として次の三点が強調されたのでした。

- 1 他民族の美点を探し求めること。(今日までややもすれば欠点を探すことに急ではなかったか)
- 2 各人他民族に少なくとも一名の心からなる友人を持つこと。
- 3 他民族の言語を習得すること。

(『石原莞爾選集』6 「東亜連盟建設要綱」 たまいらぼ刊 1985)

平易な言葉ながら、今日でも通用する民族協和のための第一原則と言ってよいでしょう。あれから 65 年、これに呼応するかのような中国人の主張が新聞紙上に現れました。

毎日新聞は 4/17 朝刊の「発言席」に、日中交流研究所長・段躍中 (トアユエ・ツウン)

氏の言葉を掲載したのです。そのタイトルは「日中理解に自ら発信しよう」でした。この記事のを要約しますと

- ． なぜ首都北京でこんなに大きなデモが行われたのか。在日中国人として心を痛めている。
- ． 政府間の交渉を傍観しているだけでは、この局面を打破できない。
- ． 日中交流研究所は、相互理解を深めるために「日本人による中国語作文コンクール」と「中国人による日本語作文コンクール」を同時開催する。
- ． 互いにその国を理解し、その国の言葉で語りかけることが相互理解への道を開くと信じている。
- ． 日中関係の基礎は国民にあり、国民の感情こそが 21 世紀の日中関係を左右する。

私は庶民の地道な目に見えないような努力の集積が、結局は歴史を動かすことを信じています。

それからまた、宮沢賢治の

「世界がぜんたい幸福にならないうちは個人の幸福はあり得ない」

「新たな時代は世界が一つの意識になり生物となる方向にある」

という言葉はその通りだと思っているのです。